

## 津軽民謡の伝承

——平館村を中心に——

はじめに

- 一 平館村の民俗音楽の状況
- 二 平館村の民謡の伝承と社会的背景
- 三 津軽の民謡の伝承  
おわりに

### 論文要旨

青森県東津軽郡平館村の民俗音楽を調査したところ、労作民謡はにしん漁でかつて歌われたにしん場音頭を伝えているだけできわめて少なく、また地域の共同体の生活と結びついた歌も、ひじょうに少なかった。そしてその代りに津軽民謡として全国的に有名な「じょんから節」などが歌われ、日本海沿岸諸県や北海道の民謡も、盆踊りや酒宴などで多く歌われていた。

そのため平館村の人々がどのように民謡を伝承してきたのか調べてみた。その結果、もちろん従来のように暮らしの中で自然に覚えてきた例もあったが、むしろラジオ、レコード、民謡の旅芸人たちの歌会、門付けするボサマの歌などによって、プロの民謡を覚えた形が主流であった。

平館村は近世に入ってから移住者たちによって開かれた村で、漁業中心の

生活がつづき、集落の共同体の組織も弱く、共同体の生活の中で伝えられることの多い伝統的な民俗的な諸事象も、束縛が弱く、新しいもの、他所のものを気安く受け入れ易い状況があることがわかった。

ところがこうした平館村の民謡の伝承の状況は、実は平館村だけではなく、津軽全体に共通する現象であることがわかった。津軽ではすでに大正期からプロの民謡歌手たちが多数輩出し、民謡は文字通り生活の糧になっていた。また青森県の代表的な地方紙である東奥日報社が、早くも昭和九年から津軽民謡のコンクールを行っており、これが津軽の人々に熱狂的に受け入れられた。

こうして一方では津軽民謡はプロの芸人たちの手で、全国的に知られるようになるとともに、一方ではそれ以外の地元民謡を忘れさせ、すたれさせる結果になったのである。

そして津軽の民謡が早く経験したこのような状況は、今全国の民謡に現われ始めている。その意味でこの津軽の民俗音楽の状況は、津軽地方の民俗音楽の地域的特性を表わしているばかりでなく、現在、日本全国で起こっている民俗音楽の今後の動きを示す例としても注目される。

小島 美子